

地域つながるプロジェクト：留学生参画の成果と課題  
 CONNECTING INTERNATIONAL STUDENTS TO LOCAL COMMUNITIES:  
 ITS EFFECTS AND ISSUES

竹井 光子, 広島修道大学 国際センター  
 Mitsuko Takei, International Affairs Center, Hiroshima Shudo University

### 1. はじめに

日本で学ぶ留学生にとって、授業以外の場面における学内外での交流や活動が日本語運用能力の向上や異文化理解の深化を促進する手助けとなることは言うまでもない。日本語学習者が日本語に接する接触場面の研究も盛んである（ニューストプニー 1995）。

広島修道大学では、「キャンパスでつながる」「地域とつながる」「世界とつながる」をキーワードとして、キャンパスおよび地域内で日本人学生と留学生とが交流を深めるための仕組みや環境を提供している。本稿では、その一つの試みとしての地域との連携プロジェクトの概要を紹介するとともに、同プロジェクトに留学生が参画した成果と課題について、課外プロジェクトから正課授業への転換を視野に入れながら、留学生へのアンケート調査の結果を踏まえながら論じる。

### 2. プロジェクトの背景

本学は、在籍学生数約 6,000 名の地方の中規模私立大学である。地元の経済界の要請を受け 4 年制大学を設置した沿革の中で「地球的視野をもって地域社会の発展に貢献できる人材の養成」を教育理念とするなど、地域との密接な関係や連携の重視を特徴としている。2013 年に採択された知（地）の拠点整備事業「イノベーション・ブリッジによるひろしま未来協創プロジェクト」もこれを後押ししている。

一方で、国際交流の面では、現在 14 の国・地域に 31 の協定大学を持ち、2015 年度の留学生受入れ実績は学部生、大学院生、協定大学からの交換留学生を含め 143 名、派遣実績は協定大学への交換留学生、中期・短期セミナーへの参加を含め 122 名であった。学生数 6,000 名という母数からすると、大学のグローバル化の中で受入れ・派遣のさらなる拡大が課題であると言える。

これらの背景から、少数ながらも常時一定数の留学生がいる環境を活用し「キャンパスでつながる」すなわちキャンパス内での多文化交流が「世界でつながる」ための派遣の促進のきっかけとなり、受入れの拡大につながる魅力あるキャンパスづくりに寄与するという好循環を生み出すことが国際センターのミッションと考えている。そして、その交流には「地域とつながる」という地域貢献・地域連携の要素を意識して加えている。

### 3. プロジェクトの概要

2011 年度に始まった「地域つながるプロジェクト」は、地域の団体と連携し、地域の課題を解決する企画を立て、それを実施する活動、または、地域の諸課題の解決を目的に調査・研究する活動を支援する試みで、活動費用を大学が補助し

ている。4月に公募が開始され、5月に選考結果の発表と説明会、6月に「塾義ウィーク」（チーム内の話し合い）、7月に「学びあいミーティング」（チームを超えた話し合い）を経て、2月には成果報告会で活動の成果を発表するとともに、審査と表彰が行われる。

毎年度、指導教職員が率いる15チーム程度が活動している。チームはゼミを単位とするものが大半であるが、2014年度からは国際センターが中心となって結成した留学生と日本人学生のチームが3年連続で参加をしている。本稿では、2015年度の「インターナショナルハウスがある町-広瀬：多文化交流プロジェクト」の活動に基づいてその成果と課題を検証していきたい。

#### 4. 活動内容

本プロジェクトでは、オフキャンパスの留学生寮（インターナショナルハウス）がある広瀬北町（広島市中区）を連携地域・活動拠点とした。同町は市の中心部に近い地区のため、家族世帯の減少、地域の絆の希薄化、若者の活気の欠如などの課題があることが町内会長への聞き取り調査によりわかった。そこで、インターナショナルハウスに居住する留学生が地元（学校、町内会）の諸行事に参加し多文化交流を進めることで地域の活性化や多文化共生への理解の促進にどう貢献できるかを検討・調査することを活動目標にすることになった。

実際に参加したイベントは、あいさつ運動（小学校）、ふれあいフェスティバル（小学校・日曜参観）、ふれあい給食（小学校）、運動会（小学校、町内会）、地元の神社の秋祭り、放課後プレイスクールなど多岐に渡るが、年間の参加者延べ数は106名にもものぼった。

#### 5. 活動の成果：地域の声

活動内容は、成果報告会においてポスター、プレゼンテーションの2つの形態で発表を行ったが、幸いにも最優秀賞をいただくという成果をあげることができた。



そして、プロジェクトの目標をどの程度達成できたかについては、大規模な調査は実施できなかったが、地域の人々の声からひろうことができる。例えば、以下のコメントである。

- ・留学生が学区内の身近な存在になった
- ・交流した児童の中に「世界中の人とつながる」という気持ちが芽生えた
- ・留学生が夢や志をもって来日していることに気づいた

いずれも、多文化共生への理解の促進に向けた小さな種まきができただけではないかと感じられるコメントである。また、運動会に参加した元気のよい留学生の存在を知った町内の方から秋祭りの神輿の担ぎ手になってほしいとの依頼がセンターに届いた。これは、「若者の活気の欠如」という地域の課題に対して多少なりとも貢献できた可能性を示す喜ばしいエピソードである。

## 6. 活動の成果：留学生の声（事後アンケート）

プロジェクトとしての活動は賞という形で評価を得ることができたが、これらの活動に参加した留学生が地域との交流という接触場面において何を心得て何を感じたかを知るために、留学生に対する事後アンケートを実施した。アンケートの実施概要は下表の通りである。

表1 事後アンケートの実施概要

対象者	インターナショナルハウスに居住する留学生 33名 (2015年9月/2016年4月来日)
実施日	2016年7月
対象イベント	2015年9月～2016年5月実施の15イベント
回答者数	33名 (内 イベント参加者 20名)
イベント参加度	平均3.5イベント (1～6イベント) 不参加 13名

質問項目は、4件法と記述を組み合わせた以下の内容である。

### ① イベントへの参加が日本文化の理解に役立ちましたか？

4. とても役立った
  3. 役立った
  2. あまり役立たなかった
  1. まったく役立たなかった
- イベントに参加して、日本文化についてどんな新しい発見がありましたか？

### ② イベントへの参加が日本語力の向上に役立ちましたか？

4. とても役立った
  3. 役立った
  2. あまり役立たなかった
  1. まったく役立たなかった
- それはどんな点においてですか？

### ③ イベントへの参加が地域へのつながりを深めるのに役立ちましたか？

4. とても役立った
  3. 役立った
  2. あまり役立たなかった
  1. まったく役立たなかった
- それはどんな点においてですか？

④留学生だけでなく、日本人学生と共にイベントに関わることは意義があると思  
 いましたか？

4. とてもそう思う
  3. そう思う
  2. あまりそう思わない
  1. まったくそう思わない
- それはなぜですか？

⑤自由コメント

アンケートでは最初に提示した 15 イベントへの参加の有無を尋ね、参加がゼロの留学生は回答がそこで終了しているため、集計に用いた回答者数は 20 名である。まず、4 件法による質問への集計結果を表 2 に示す。

表 2 事後アンケートの集計結果

①日本文化の理解	3.75
②日本語力の向上	3.25
③地域へのつながり	3.45
④日本人学生との協働	3.55

4 つの項目の中では、日本文化の理解が最もポイントが高く、日本語力の向上が最も低いという結果となった。これらのポイントと関連させながら記述回答から読み取れることを以下にまとめる。

①の「日本文化に関する新たな発見」については、運動会での取り組みの真剣さ、給食当番・掃除当番への責任感、ラジオ体操の世代を超えた定着度、学校内の携帯電話の禁止など、自国での慣習と異なる事例への驚きを表現するものが多く見られた。また、神社を中心とする行事から *neighborhood spiritual life* を感じ取ったり、日本の集団主義の一端を垣間見たりと、驚きや体験を分析する姿勢も見られた。さらに、内容の理解が難しかった神楽を後日にリサーチしてみるなど、娯楽に留まらず、日本文化の探求に発展させる行動の例を見られた。

②の「日本語力の向上感」については、年配者や子供、小学校教諭など、相手に対して使い分ける言葉遣いや方言（広島弁）を意識するきっかけとなったとするポジティブな反応がある一方で、自己紹介の機会は多々あったが、高い能力を求められる場面がなかったために、日本語力が向上した・向上に役立ったという実感はなかなか得られなかったようである。

③の「地域とのつながり」は、地元のイベントに参加することで、地元と人々と顔見知りになり、後日町内で出会った際に挨拶をするようになったことが大きな変化でもあり喜びでもあったようだ。「Hiroshima citizen」, 「地域の一員」, 「自分の家」, 「地域に住んでいる実感」などの言葉で表現しているように、つながり感は増したようである。

④の「日本人学生との協働」についても好意的にとらえており、特に同世代の日本人の考え方を知れたことを大きな収穫と感じている。また、困ったとき、日本語が分からないときにサポートしてくれる日本人学生の存在は不安感の軽減に役立っている。また、留学生にとって課題の一つである友人づくりの良いきっかけにもなっているようである。さらに、「『留学生のびっくり』に日本人学生がびっくり」という場面もあったようで、日本人学生にとっても留学生の反応に接することで自文化を再認識、再分析するきっかけになるという双方向の学びが起きている。

アンケート対象の留学生33名のうち、地域イベントへの参加無しが13名あったことも事実である。理由としては、「興味がない」というコメントを始めとして、優先順位の差（アルバイトなど）、社会志向の差が考えられる。

## 7. まとめと今後の課題

本稿の目的は、留学生が参画できる課外活動としての地域との連携プロジェクト「地域つながるプロジェクト」の概要を紹介するとともに、その成果を参加した留学生へのアンケート調査の結果から探りつつ、この課外活動を正課の国際共修授業へと発展させる場合の課題について考察することであった。

前節で述べたアンケートの回答分析からは、地域での活動や交流は「学び」や「経験」の宝庫であること、留学生と日本人学生の協働から生まれる相乗的効果も期待できることが分かった。

一方で、日本語能力の向上感を示す数値が低かったことについては、言語学習が主目的のプロジェクトではないものの、向上感や達成感を得ることができる仕組みや工夫、言語運用面での気づきの促しと導き、さらなる動機づけにつなげる道すじを提供する必要性も感じられた。

本プロジェクトは、外国語学習のめやす（當作, 2013, 當作・中野, 2013）に示された「教室の外の人・モノ・情報とつながる」ことを具現化しようとするものであるが、正課への移行の際には、言語領域、文化領域において「わかる」「できる」との連関も重要であろう。本学では、「多文化交流プロジェクト」という国際共修科目として位置付ける予定であるが、「日本語」や「日本研究」の科目担当者との連携を実現させたいところである。

国際共修は、大学の国際化推進への要請が高まる中、グローバル人材育成の一環として日本国内の大学教育において注目されており多くの先行事例がある中、教授法の確立に向けた動きもみられる（末松, 2014）。本学においても、本プロジェクトを足がかりに先例に学びながら乗りだすところである。

世界のさまざまな地域からの留学生が集う日本の大学における共修の場で使用される言語としては、「共通語としての日本語（Japanese as a lingua franca: JLF）」および「共通語としての英語（English as a lingua franca: ELF）」が考えられるが、先行するELF研究に加えJLF研究も大学の国際化の潮流の中で注目されつつある（Ikeda & Bysouth, 2013）。このJLFに対する日本人学生と留学生の意識とその変化の調査も同時に行っていく予定である（野上, 2016）。

## 参考文献

- 末松和子(2014) 「キャンパスに共生社会を創るー留学生と日本人の共修における教授法の確立に向けてー」 『留学交流』 Vol. 42, 11-21 独立行政法人 日本学生支援機構 (JASSO)
- 當作靖彦・中野佳代子(2013) 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』 公益財団法人 国際文化フォーラム (TJF)
- 當作靖彦 (2013) 『NIPPON 3.0 の処方箋』 講談社
- J・V・ネウストプニー(1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 野上陽子 (2016) 「共通語としての日本語への意識調査：国際共修の場におけるインタラクションを通じて」 カナダ日本語教育振興会 2016 年度年次大会 (CAJLE 2016)
- Ikeda, Keiko. & Bysouth, Don. (2013). Japanese and English as Lingua Francas: Language Choice for International Students in Contemporary Japan. In Harberland, Lønsmann and Preisler (eds.), *Language Alternation, Language Choice and Language Encounter in in International Tertiary Education*, pp. 31-52. Springer Science & Business Media.